



千葉大学 工学部 都市環境システム学科

永石悠里子

計画対象地は、千葉県茂原市の茂原駅周辺。大型商業施設の撤退・郊外への進出の影響で駅周辺は、人通りの減少、空き店舗の増加、さらに治安が悪化するといった状態に陥っている。そんな茂原駅周辺に対し、廃業した大型商業施設を居住施設にコンバージョンすることを主軸とした再生計画を提案する。人の目による防犯性を高め、茂原の街を安全にしたい。そのために最も有効な方法は居住の推進ではないだろうか。居住を推進するためには住まい、街ともに魅力的である必要がある。魅力的な住まい、街を構築し、“茂原らしい”ライフスタイルを提案すること、これが本計画の趣旨である。また、コンバージョンした5つの居住施設の周辺に豊かな生活をもたらす施設を空き店舗を活用して配置する。



## 講 評

千葉県の利根川沿いの某市で仕事をした。その駅前通りはシャッター通りと呼ばれているという。いかにも閑散として寂しそうだった。それでもまだこの街は有名なお祭りもあり、観光地としても恵まれてはいる。

心痛める現象が、各地の街で起きている。街中を活性化しようというまさに町おこしのアイデアがこの茂原市での提案である。これまで、まずひとを呼ぶ為に企業なり工場なりを誘致してきた。まず人に住んでもらおう、魅力的な住まいの提供と、街を再構築しようという意気込みの再生計画である。シャッターの下りた商業施設などを細かく調査して、修繕改修して、居住者のライフスタイルに合わせて、様々なニーズに答えて行こうという。

既存の建物の耐震性の補強など絡めて、魅力ある街中に住む利便性や模型などから感じられる魅力的な住まいが、“茂原に住もう”からもっと広がって各地の関心をよびそうだ。

[ 審査員 泉川安雄 ]